

寺院の移り変わり 地蔵院と相頓寺

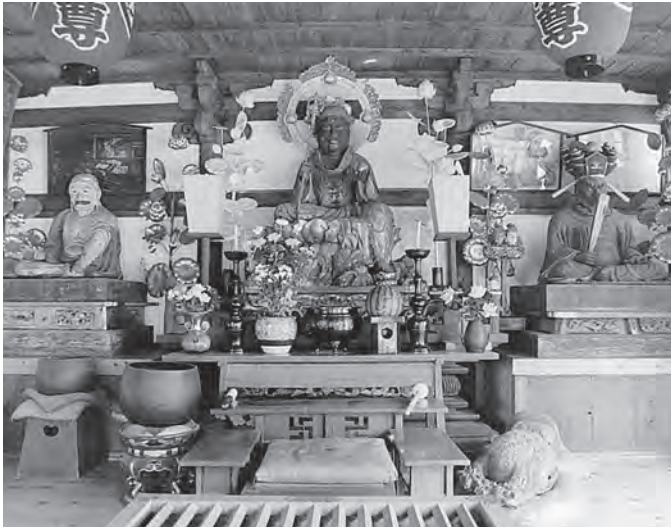
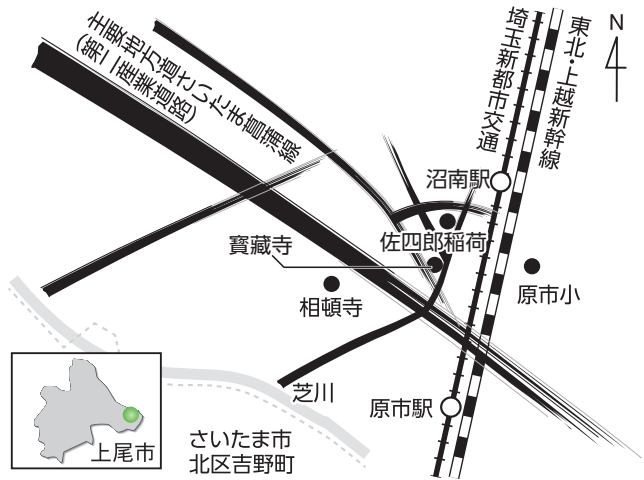


写真1 相頓寺三仏(市指定、中央が延命地蔵尊)



江戸時代末期から明治時代
初頭前期にかけて、寺院の数は著しく減少した。不況による建物の荒廃や廃仏毀釈、明治政府による神仏分離などが主な要因である。上尾市内においても、江戸時代後期に編さんされた『新編武蔵風土記稿』には100を超える寺院・堂庵が掲載されているが、明治時代前期に作成された寺院・堂庵の『明細帳』では半数以下となっている。これは、明治維新後に、住職が不在で維持が困難となった寺院が強制的に廃寺となったことや、寺社領が接収されるなどして、多くの寺院が統廃合されたためである。その際、廃寺となる寺院や堂庵にあった仏像・仏具は、近くに存続する寺院に移された。原市の相頓寺にある地蔵堂に納められている延命地蔵も、その一つである(写真1)。

延命地蔵は地蔵院の地蔵堂に納められていたもので、平安時代後期の仏師定朝作、奥州の藤原秀衡の守護仏であったという。しかし同書には、像の胎内に文禄5(1596)年3月24日、当時この辺りの地頭であった西尾小左衛門尉(隠岐守吉次)が開眼したとの書付があると記されており、容姿や衣服の表現などから実際はこの頃に制作されたと考えられる。その他、光背・台座などに墨書銘が残されており、享保7(1722)年に江戸の仏師・幸慶、同次兵衛、塗師・孫兵衛らによって制作されたことが分かる。

なお、相頓寺地蔵堂には多くの絵馬も収められており、その中の幾つかは、延命地蔵と一緒に地蔵院から移されたものと伝えられている。政府による宗教政策や不況によって寺院が減少する中でも、人々の信仰の心は受け継がれたのである。(上尾市生涯学習課)

コラム column

佐四郎稲荷と新幹線

文化財が移動した例は他にもある。原市の佐四郎稲荷(写真2)はその一つであり、新幹線開通に伴う敷地整備のため現在の位置に移された。

佐四郎稲荷は、昭和56(1981)年にこれまで南向きであったものが、5メートル移されて西向きにされた。江戸時代に市場集落として栄えた原市下町の氏神として、多くの人々から信仰された神社である。慶長年間(1596~1615)に原市に住んでいた坂巻四朗と遠藤佐吉の2人が、病の治った御礼参りで伊勢神宮に行き、帰り道に豊川稲荷にも参拝したおかげ

で無事に原市に帰ることができたため、これに感謝した坂巻家の裏山に稲荷神社を祀ったのが始まりという。そこで佐吉と四朗の名を取り、佐四郎稲荷としたと伝わっている。もう一つの説として、笠間稲荷の裏山に佐白稲荷という神社があり、ここから分社したものともしよう。

また、寶藏寺のらかんまき(写真3)も、新幹線開通に伴って場所が移された文化財で、元は境内の西側にあったものが現在の位置に移植された。樹齢は500~600年と推定され、往古から残されている貴重な樹木である。



写真2 佐四郎稲荷神社



写真3
らかんまき